

# 「Face-To-Faceの会」だより

## 大阪市大における医療連携プログラム

第二号 2008年12月 発行:大阪市立大学病院「Face-to-Faceの会」 文責:荒川哲男(代表世話人) 連絡先: 06-6645-2711 庶務課 佐々木吉哉

### 「来てみて良かった」「ためになった」の声続出

雲ひとつない晴天の秋、2008年11月15日の土曜日。絶好の観光日和にもかかわらず、大阪市大医学部学舎6階の中講義室に約40名の先生方にご参集いただき、第8回の「Face-To-Faceの会」が開催されました。大阪市立大学病院と大阪府医師会11ブロックの共催で、実地医家と専門医が顔を会わせて知り合いになることで、スムーズな医療連携に結びつけようという目的で始まったこの勉強会も、まる3年経ちました。

### がん化学療法の進歩に伴う地域医療連携ネットワークの重要性

当院では、外来化学療法センターが今年本格稼働し、化学療法を行う機会が増えてきました。腫瘍外科学の高島 勉先生から、症例の紹介を元に、乳癌の化学療法に関するトピックスをお話いただきました。EGFレセプターの抗体であるハーセプチンが出てから、乳癌の治療成績が上がり、病病連携・病診連携がますます重要な意味を持ってきました。当院は昨年5月に電子カルテを導入しましたが、とくに連携クリニカルパスに力を入れています。病院から地域の医院・診療所へスムーズに医療連携が取れるようにするには連携パスは欠かせません。なかでも、乳癌の患者さんは比較的若く、元気な人が多いことから地域との医療連携は重要です。地域で担っていただく実地医療は、化学療法導入後から緩和医療に入るまでの間の期間ということで、登録制になっているそうです。



### 先天性異常の形成手技で機能の改善も

ところで、当院の形成外科では、しみなどの自費診療を開始したことの情報提供を前回の本会で行いましたが、今回は主として先天性異常の形成について、若見暁樹先生から症例を中心にご紹介いただきました。副耳、耳瘻孔、小耳症、埋没耳などの耳介の異常の矯正や形成術から眼瞼下垂、脂腺母斑、口唇裂の手術まで、多岐に渡る顔面の形成の進歩を見せていただきました。とくに、ひどい口唇裂が縫合線までほとんど分からないくらいにまできれいに形成されているのには驚きました。単にコスメティックな意味合いだけではなく、形



完全唇顎口蓋裂に対する口唇癒合術



態の異常が機能異常に結びつくことから、形態の正常化は機能の改善をもたらすということを学びました。たとえば耳介異常の改善は集音能力の改善につながったりするわけです。

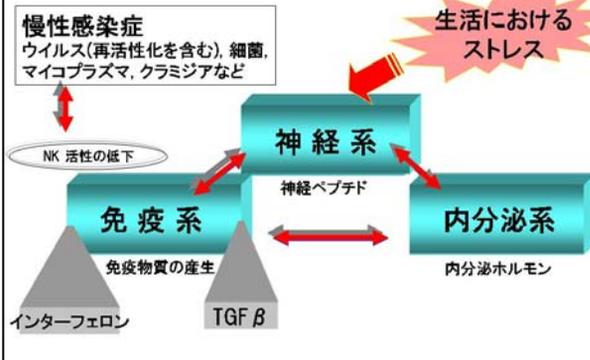
### 慢性疲労症候群は経済的損失に

ミニレクチャーでは、倉恒弘彦先生から疲労についての講演をいただきました。大阪市大医学研究科では、COEという大きな官学プロジェクトに、疲労をテーマにした研究計画が採用され、進行中です。それに伴って附属病院では疲労外来が設置され、慢性疲労症候群の診断治療がなされています。多くの患者さんが来られ、診療に当たる医師の方が慢性疲労症候群に陥りつつあります。

日本でのアンケート調査では何と6割の人が疲れていると答えています。その半数以上が6ヶ月以上疲労が続いている慢性症状を有しているそうです。そのような人では半数弱に作業量の低下が起こり、ひどい人では休職する場合もあるそうです。このことにより、医療費を除いても日本では1.2兆円の損失になるそうです。実に大きな経済的損失につながるということがわかりました。



### 慢性疲労に陥るみちすじ



慢性疲労症候群は検査所見で異常が出にくく、精神科受診を勧められるケースも少なくないそうで、それで

も異常が見つからない場合が多く、最終的に「気のせい」にされてしまうことが案外多いようです。しかし、詳しく調べると免疫能の低下(NK活性が正常の1/3)や副腎皮質ホルモンの低下がみられるとのこと。要するにストレスに弱い状態が形成されているわけで、一種のストレス病といえます。表現系としては、単純ヘルペスウイルスの再活性化などがおこり、口唇口角の湿疹ができたりして分かることもあるようです。交感神経緊張状態の人が多く、ストレス病の特徴が随所にみられますが、ここまで聞いていると、消化器病で現在問題になっている機能性消化管障害(機能性ディスぺプシアや過敏性腸症候群)の患者さんと類似点が多いことに気づき、身近に感じました。

診断のポイントは倉恒先生が要望を受けて作成された調査票(VAS)が便利です。治療は漢方薬では補中益気湯、またビタミンB12、B1、Cも効果が期待できそうです。ミドリの香りや認知行動療法なども治療手段になります。セロトニン・トランスポーターが増えている人もあり、うつ病の治療薬であるSSRIが少量で効果を発揮することもあるそうです。会場からの質問に答える形で、入院治療は外来治療と大差ないことから、基本的に入院治療は行っていないことが分かりました。

#### 情報提供コーナー

##### 1)小児科病棟では即入院可能

まず小児科からは、医局長の岡野善行先生による情報提供があり、入院待ち人数が現時点で0で**即入院が可能**であることが分かりました。白血病など免疫能が低下している患者が多いですが、感染症でも感染力の強いものを除いて入院してもらえます。

本院では5年前に比べて平均在院日数がほぼ1/2となったこともあり、全般的に入院待ち日数も短縮してきています。5年前のように、ひどいところでは数ヶ月待ちで、折角ご紹介いただいても関連病院に又紹介するようなこともありましたが、現在では一部の診療科を除いてほとんどありません。消化器内科を例に取りますと、以前は入院3ヶ月待ちが普通でしたが、今は2-3週間待ちに短縮しています。これまでの「どうせ大学病院に送っても・・・」という考えは払拭していただき、ご紹介いただきたいと思います。

##### 2)外来化学療法センター本格稼働

外来化学療法センターでは、がん拠点病院を目指して頑張っており、准教授で初めてのセンター長に工藤新三先生が数ヶ月前に就任されました。現在、手狭で十分な症例をこなしていませんが、拡張を含めて改良を検討中だそうです。また、**がんプロフェッショナル養成プラン**が始まり、がん専門医を目指す医師を募集しています。若い先生が化療センターに丸投げして、勉強しなくなるか？といった疑問が投げかけられましたが、がん診療に携わる全ての科がこの加療センターに参画しており、治療方法等も各診療科ごとにチームで決めているので問題ないとのお答えでした。



若い先生が化療センターに丸投げして、勉強しなくなるか？といった疑問が投げかけられましたが、がん診療に携わる全ての科がこの加療センターに参画しており、治療方法等も各診療科ごとにチームで決めているので問題ないとのお答えでした。

### 3)肝疾患診療連携拠点病院に認定

次いで肝胆膵内科の河田則文教授から、当院が肝疾患診療連携拠点病院に認定されたことの報告がありました。C型肝炎やその延長線上にある肝細胞癌の撲滅に向けて、政府は年間約200億円の巨費を投じることを決めました。主にインターフェロン療法の公的補助です。とくに大阪は肝臓病のメッカ(?)と呼ばれ、肝癌の死亡者数は全国1で、頻度は沖縄県全体の10倍にも及んでいます。C型肝炎撲滅のために、**市大病院を拠点とする地域ネットワークを形成し**、医療連携を図りたいと締めくくられました。



次いで肝胆膵内科の河田則文教授から、当院が肝疾患診療連携拠点病院に認定されたことの報告がありました。C型肝炎やその延長線上にある肝細胞癌の撲滅に向けて、政府は年間約200億円の巨費を投じることを決めました。主にインターフェロン療法の公的補助です。とくに大阪は肝臓病のメッカ(?)と呼ばれ、肝癌の死亡者数は全国1で、頻度は沖縄県全体の10倍にも及んでいます。C型肝炎撲滅のために、**市大病院を拠点とする地域ネットワークを形成し**、医療連携を図りたいと締めくくられました。

#### アフター5こそがFace-To-Face

会の後、親交を深めるためにささやかな懇親の場を学舎3階の生協食堂で行いました。初参加の先生方もおられ、講師の先生を交えて新たな輪が広がりました。会の内容は豊富で、大学病院ならではの先進医療の紹介や患者さんを紹介いただくタイミングなど、勉強になったという声が聞けて、世話人としてもうれしくなりました。この会を通じて地域の医療連携がより一層強化されることを願っております。翌日に控えた「プライマリケア学会近畿地方会」の主催者である阿倍野区医師会と大阪市立大学の世話人の先生方は、懇親会のあと、準備のために国際交流センターに向かわれました。



#### 次回(第9回)「Face-To-Faceの会」のご案内

開催日時: 平成21年2月21日(土) 午後3-5時  
 場所: 大阪市立大学大学院医学部学舎4階 中講義室  
 ミニレクチャーとして、泌尿器科の仲谷達也教授より「**進歩する前立腺癌治療**」というテーマでお話いただきます。ふるってご参加ください。参加は無料です。なお、次回より本会の出席は**研修医の研修単位**として認められることになりました。若い先生方もどしどし参加して、広い視野を持った医師になるよう勉強に励んでくださいね。